

山口県総合図書目録システムの取り組みから

— 小規模図書館の参画を目指して —

● 岡田 隆

1. はじめに

山口県図書館協会ネットワーク研究部会（以下、ネットワーク部会）は、当時始まったばかりの日本のインターネットをどう図書館的に使っていかという学習・活用法から実践までを対象とした、新しい図書館サービスの具体化を念頭においた活動を目的に、大学図書館員を中核にして館種にこだわらない組織として誕生した。

今回はこのネットワーク部会が取り組んできた「山口県域総合図書目録データベース」取り組みの過程と、その結果を受けた新たな取り組みについて簡単に報告したい。

2. パイロット版にむけての取り組み

取り組みの発端は、1998年春に山口県が発表した「山口県教育ビジョン」である。この中に「図書館資料の総合目録化の推進」がうたわれており、これに注目して「パイロット版」の作成をネットワーク部会で行ってみることとなった。

初版の作成にあたっての留意点は、

- ・インターネットで公開すること
- ・横断検索にはしないこと
- ・金と時間をかけないこと

の3点で、書誌同定やシェアードカタログ等の課題は先送りすることにして開発を行うことにした。開発したデータベースサーバの仕様は、

P2/333Mhz メインメモリ：16MB

ディスク容量：10GB

BSD系 PC-UNIX

PostgreSQL（試験版はMySQL）

Apache+PHP

で、予算面での経費は無いに等しいため、ハードは部会員の私物を借用し、ソフトはすべてフリーソフトを使って構築した。また、ネットワーク環境は山口県立大学や個人の専用線等を間借りしてなんとかまかなった。

このシステムは、横断検索にはしないことから総合図書目録のデータベースをセンター設置のサーバに収めるセンター集中型の構成で構築したため、データ項目はかなり省略化した簡易的なパイロット版専用のデータベースとなった（データ調整を行う時間が無かったことが主な理由ではあるが）。

こうして出来上がったパイロット版は山口県図書館振興大会で一般公開され、一応の評価を得ることができた。

3. 実用化試験版の開発と問題点

これを受けて、山口県図書館協会の実用化試験事業としての承認を得て、実用化に向けての試験版作成作業に入り、以下5館（約80万冊）での実験開始となった。これらの館が参加できた理由は取り組みに前向きであったことや、SQL系DBでシステムが作られていたりしたため、データ抽出プログラムを部会側で作成できたことによる。また大学図書館は諸般の事情により参加せず、公共図書館のみでのスタートとなった。

- ・岩国市立中央図書館
- ・宇部市立図書館
- ・小野田市立図書館
- ・和木町立図書館
- ・徳地町立図書館

課題であったネットワーク環境も、日本テレコ

図1. 書誌新規登録画面

新規に書誌を登録する画面。項目は、書名・書名ヨミ・著者名・著者名ヨミ・出版者・ISBN・出版年・分類・シリーズ名・訳者等・備考

ム(株)山口支店の支援を得られることとなり、ODN回線を借用してのインターネット公開が可能になった。

この実験を通じての最大の問題点は書誌データの抽出である。実際の抽出作業(データ更新作業)は、半年に1回ということでは予定していたが、実験期間内に1回やるのがやっとであった。また抽出プログラムの問題としては、図書館システムはほとんどが業者任せであり、内部仕様が公開されていないため、部会サイドで抽出プログラム作成をすることができなかった。だからといって業者に作成を依頼すれば相当の作成費用が発生するため、ついに実験を終了するまでの1年半の間、参加館が増えることはなかった。

今回の結果は山口県において、まもなく開始される県域目録検索サービスが「横断検索」になったことに影響を与えたと感じている。

簡単な経過だけを報告したが、詳しくはネットワーク研究会事務局担当者が報告しているので、そちらを参照していただきたい¹⁾。

4. 問題点の整理と次へのステップにむけて

3年にわたった山口県域総合図書目録への取り組みだが、この経験から規模の大きな市町立図書館では自前での図書館システム構築が可能だが、規模の小さな町村立図書館や学校図書館ではかなり困難であろうと推測された。事実、県立図書館が行った県域総合図書目録事業についての事前アンケート調査に対して図書館システム未導入館で

図2. 検索画面

業務用の検索画面。ヒットした場合は所蔵の追加や書誌を流用して新規書誌を作成したりできる。

シェアードカタログに対応しているため、画面右上にはログインしている館名が表示される。

ある13館すべてが総合目録事業への参画を不可能あるいは未定と返答している。また、このシステム構築で培ったデータベース運用のノウハウは現在試験運用している「山口県域レファレンスDB」に引き継がれており、新たな可能性を秘めたシステムへと成長している。

当面、県域総合目録が横断検索でスタートするとなれば、図書館システムの構築ができない小規模図書館は切り捨てられざるを得ない。しかたがないで片づけるのは簡単だが、どうしたら小規模図書館を救えるかを主目的に、ネットワーク部会の有志で問題点の整理を行った。

小中高等学校にPCやネットワーク環境が整備されていながら、その環境を使って自校が所蔵する図書検索すらできない状況をなんとかしたいという思いも強く、真剣な検討が行われた。

その結果として、

- ・微弱な経費での目録システム構築
- ・微弱な経費でのインターネットによる目録公開
- ・MARCに依存しない目録作成
- ・書誌同定、複本管理
- ・シェアードカタログ(共同目録作業)
(書誌ユーティリティ型)

この上記5点をクリアできればなんとかなるという結論を出し、とりあえず試行版に向けての仕様検討に入ることにしたが、ネットワーク部会においてこれ以上の作業を続けるには無理があるため、部会を離れ有志による作業となった。

このサーバシステムの構築からは、現役あるい

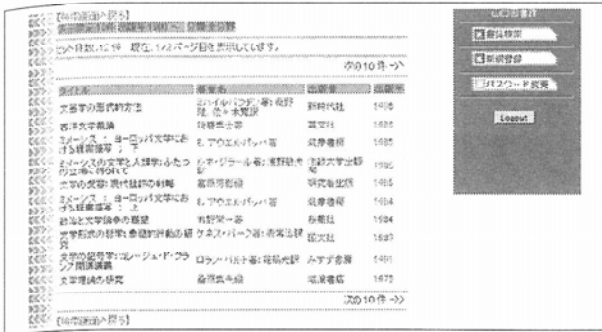


図3. 検索結果表示画面

検索結果の簡略表示画面。タイトル(書名)・著者名・出版者・出版年を表示する。デフォルトでは10件ずつ表示。

は元図書館員といった、ある程度図書館の仕事がわかる者ですべてを行ったため、図書館員の手でシステムの点検・改良ができる、使い勝手のよい小回りの利く試用版を作り上げることができた。試用版は目録作成検索部分のみだが、なんとか課題であった5項目をクリアできて安堵している。画面を少し紹介すると、上図のような流れになる。

この目録登録検索部分に利用者管理機能と貸出・返却・予約機能を付加すれば、それなりの図書館システムとして機能するのではないかと公共図書館のメンバーから指摘があり、機能付加が容易なシステムになるよう基本設計の仕様変更を行った。

現在は仕様変更にそった最終的な開発を行っている最中である(試用錯誤の連続であるが)。

5. 図書館職員によるシステム作成

ネットワーク部会を離れ、有志による開発を行うのであれば、山口県に限定せず近隣も含めてやろうということで、最終開発は山口・福岡・佐賀・長崎の図書館関係者で行っている。メンバーは大学図書館員と公共図書館員が中心だが、残念ながら山口県からの公共図書館員の参加は無い。連絡調整はML(メーリングリスト)を活用しているため無理のない開発スタイルとなっている。

実は開発にかかわっている主なメンバーは、以前から「西の果てネットワークチーム(以下、FWNT)」という勝手な名前を名のった人々であり、山口県や福岡・長崎県でネットワーク学習会等を企画してきた図書館員たちである。そのほとんどが自宅にネットワーク環境を持ち(中には専

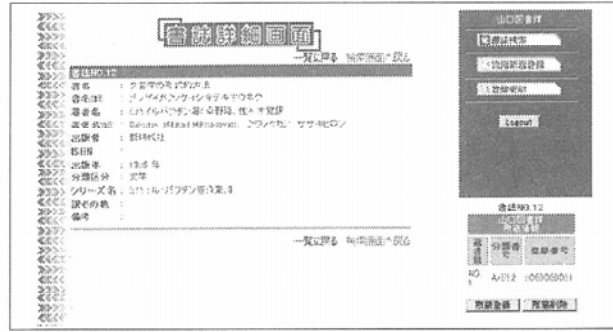


図4. 書誌詳細画面(所蔵表示)

書誌詳細表示画面。右下に所蔵情報が表示される。

また、右上には流用登録や書誌修正用の登録更新の表示が出ている。重複の場合は所蔵登録を押すだけで処理が終了する。

用線を持っている者もいる)、サーバ関連やセキュリティ等についてもある程度のスキルを持った連中である。当然ながら最初からそうであったわけではなく、FWNTとして場数をこなす中で成長してきた技能集団である。

現時点での進捗状況は、今春にプロトタイプを完成させシステム評価を行う予定である。正直なところ、開発の中心を大学図書館員が行っているため、評価の時点でかなり辛辣な意見を公共図書館の方からいただくことが多く、館種を越えた取り組みの意外な?効果に少し驚いている。今年の夏には、実用試験として幾つかの図書館で稼働できることを「夢」として取り組んでいくつもりである。

また、小規模な町村図書館だけではなく、学校図書館への導入も目標としているので、できれば学校図書館関係の方のご支援がいただくと大変ありがたいと思っている。

山口県域総合図書目録システムから始まった取り組みであるが、一番の問題であると感じた経費面での課題は、このシステムの実現でクリアできるのではと期待しているし、できるだけフレキシブルなシステムにして、小規模図書館が抱えるさまざまな課題を解決できるものになればと思っている。

注

1) 町田敬一郎「山口県域総合図書目録構築の試み」『図書館学』(西日本図書館学会) No.79 pp.15-21 2001.9

(おかだ たかし: 山口大学附属図書館)
[NDC9: 014.35 BSH: 図書目録(図書館)]